

令和 5 年 6 月 23 日現在

機関番号：12601

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2022

課題番号：20K21918

研究課題名（和文）竹内好のアジア論と終末観

研究課題名（英文）Asianism and Eschatology in Takeuchi Yoshimi

研究代表者

王 欽（WANG, QIN）

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：80875683

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 500,000円

研究成果の概要（和文）：過去三年間、本課題の支援によって竹内好の終末観とアジア論について、日本語で論文を1本発表し、英語論文と中国語論文をそれぞれ1本学術誌に掲載した。また、英語の学術誌で竹内好特集を編集した。それに関連して、2022年に『魯迅を読もう』（春秋社）という著書を発表した。そのうち、「終末論」を直接的にテーマとして取り上げる論文が1本、アジア論と憲法論についての論文が2本ある。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「終末観」という視点抜きには、竹内の魯迅論、そして竹内と魯迅の精神的なつながりを論じることができないことを、以上の成果によってある程度示しているのではないかと、思う。本研究は、これまでの国内外の竹内好研究においてあまり注目されていなかった「終末論」または「終末観」を竹内の思想を貫いているテーマとして指摘し、それをひとつの中心的磁場としたうえで、アジア論や憲法論や魯迅論など、さまざまなトピックを巻き込んで、彼の首尾一貫した思想を改めて提示した。

研究成果の概要（英文）：Over the past three years, thanks to the support of this research funding, as regards Takeuchi Yoshimi's understanding of eschatology and his arguments on Asia, I published one essay in Japanese, one essay in English, and one essay in Chinese. Besides, I edited a special issue about Takeuchi and Japanese thoughts in post-war period in *Frontiers of Literary Studies in China*. Related to the problematic of Takeuchi's eschatological thinking and his idiosyncratic reading of Lu Xun, I published in 2022 a book on Lu Xun, published by Shunjusha. In the three published essays, one is directly about eschatology, while the other two discuss Asia and the postwar Constitution for Takeuchi, respectively.

研究分野：中国近代文学；比較文学

キーワード：竹内好 終末論 魯迅 アジア

## 1. 研究開始当初の背景

竹内好は中国近代文学研究、とりわけ魯迅研究で知られている。同時に、戦後になってナショナリズムの問題を提起し、日本の近代と中国の近代との根本的な差異を革命の視野 魯迅の代表する文学革命も毛沢東の代表する政治革命も含めて のなかで収めて吟味することで、戦時中にスローガンにもなった「近代の超克」という問題設定を活性化しようとした。そのゆえに、長い間竹内のアジア論について議論する場合、研究者はほとんど彼の魯迅研究やナショナリズム研究に着目してきたといってもよい。

中国国内においても、一九九〇年代に竹内の『魯迅』がすでに訳され、日本学者による魯迅研究として読まれている。ただ、竹内が置かれた歴史的・知識的文脈を全面的に紹介し、竹内の魯迅論をより広い視野のなかに入れることで「竹内という問い」を前面に出したのは、二〇〇四年頃に出た孫歌の研究である。ほぼ同じ時期に、アメリカで竹内の有名なエッセイが一冊の本として英訳されて「もうひとつの近代」として認識されていた。それをキッカケとして、さまざまな分野で論者たちの竹内に対する興味が一気に上がって、彼の近代批判やナショナリズム論についての論考も続出してきている。

しかし、竹内の思想を貫いているもうひとつの糸、すなわち「終末観」を見逃してはならないと本研究は感じている。このキリスト教的な表現は、竹内の一九三〇年代に書いたテキストのなかですでに散見している。一方で、とくに一九六〇年の安保闘争に関する一連のエッセイをまとめる際、竹内もまさに「終末観について」といった名目の下で自分の思想の基本的な枠組みを展開しているのである。

けっしてキリスト教徒ではないどころか、キリスト教に対して十分な知識を持つわけでもない竹内は、はたしてどのような意味で「終末観」という表現を使い、いかにしてそれを彼のナショナリズムや革命やアジアに対する認識と結びつけているだろうか。「終末観」に重点を置くことで、これまでの竹内論のイメージを少しでも補足し、あるいは変えていくことができるのかも知れない。それは本研究開始当初の背景となっている。

## 2. 研究の目的

竹内の思想の根本的な枠組みについて、これまで数多くの議論が蓄積されているものの、ほとんどの議論はそれを彼が若い時に読んでいた西田哲学や京都学派に還元しようとする節がある。『魯迅』のなかで竹内が「無」や「矛盾的自己同一」といった西田哲学の概念を援用しながら魯迅文学の原点を論じようとした事実も、以上の方向性に裏付けているかもしれない。言い換えれば、もしも竹内の思想に「超越的」なものがあるとすれば、これまでの議論にしたがっていえば、それは西田哲学が開示するような「無」にほかならない、といえよう。

しかし、戦後になって竹内がはっきりと『魯迅』における西田哲学の影響を認めた上でそれをあえて思想の足りなさとして自己批判したことも事実である。では、もしも竹内と西田哲学との関係が論者たちが指摘したほど根本的でないとすれば、いわゆる「終末観」というものは根本的な枠組みを示してみせるといえるだろうか。

結論からいうと、本研究からみれば、われわれは「終末観」からけっして哲学的体系を見い出すことができないが、カントの言葉を借りていうと「超越論的」要素を垣間見ることができる。つまり、竹内において「終末観」が意味するのはキリスト教における超越的なものというよりも、むしろ彼のアジア論やナショナリズム論を成立させる存在論的条件である。それを極端的にシンプルファイしていく、始まりのあるものには必ず終わりがある、ということになる。構造的にみれば、それは竹内が繰り返して議論している政治的エネルギーが現勢力化し、そしてふたたび潜勢力へとみずから化していくプロセスと同じように見えながらも、存在論的位相からすると、「終末」という表現が提示しているように、このたえまなく動きつつあるプロセスを区切りしてはじめて、われわれは「個人」「民族」「共同体」などのカテゴリーを弁別できるようになる、というわけである。この点をおさえておけば、少なくとも竹内の「終末観」が彼のアジア論やナショナリズム論において果たしている役割は鮮明になるだろう。

すると、われわれは「終末観」というパースペクティブを導入することで、竹内の思想における「超越論的」要素を明確に指摘することができるばかりでなく、竹内を同時代のいわゆる保守的知識人（とくに一見似たようなかたちで「終末」を論じている保田与重郎）と区別することができる。例えば、中国やアメリカでは、竹内の思想をそのまま一九四〇年代に行われた「近代の超克」座談会の延長線上で還元し、彼を革命を拒ける保守主義者と同一視しようとする荒唐無稽な議論さえ珍しくない。「終末観」を枢軸として論じていけば、以上の誤解を解消することができると思われる。さらに、竹内がけっして簡単に革命を経験した近代中国社会を敗戦後の日本社会にとってのユートピアとして認識しているのではないことも明確になるとと思われる。

以上が本研究の目的となっている。

### 3. 研究の方法

すでに述べたように、竹内が「終末観」を詳しく議論するテキストは存在しない。そのかわり、「終末論」または「終末観」に関する議論は一九三〇年代から一九七〇年代にかけてさまざまなテキストのなかで、多かれ少なかれあらわれている。そして、日記にも関連するものが時には書かれている。

したがって、「終末観」を語彙のレベルを超えるひとつの「考えるヒント」として整理しようとするれば、まず細かな作業が不可欠である。本研究は、ただちに「終末観」に明確に言及している箇所を集めるのではなく、竹内において「終末観」の射程に収められる議論をなるべく網羅的に調べたうえで、彼が日記に書いてある「終末観」に関する書物にまで着目している。

同時に、断っておかなければならないのは、本研究はキリスト教において複雑に展開されてきた「終末論」についての議論をあえて言及しないことにした、ということである。なるほど、確かに竹内はキリスト教における「終末論」に関していくつかの著作を読んだことがあるが、一方で彼がキリスト教のいう「終末論」に詳しくはないと自白していることは看過すべきでない事実である。

「終末観」についての議論を収集することは第一歩である。本研究は、それらの議論をもとにして、枢軸としてのひとつのパースペクティブを練り上げようとし、さらにそれを竹内の魯迅論やアジア論やナショナリズム論と結びつけて「終末観」のダイナミズム性を強調している。いうまでもなく、それはキリスト教における「終末論」が竹内の議論においてまったく存在しないことを意味するのではない。むしろ、キリスト教のいう「終末論」は竹内の独自の解釈を通じて洗い直されたというべきかもしれない。

### 4. 研究成果

過去三年間、本研究は中国語、日本語、英語の論文を学術誌または論文集に発表し、関連する一冊の著作を刊行した。二〇二一年にアメリカの学術誌 *positions: asia critique* に発表した「Literature, Powerlessness, and Modernity: A Reading of Takeuchi Yoshimi's 'What Is Modernity?」は、竹内の文学論と近代論に重点を置くものであり、彼の「終末観」に取り組む準備であるといえよう。そのなかで、竹内が文学に託した政治思想は結局のところ「無」というより「無力」と名づけられるべきだと論じている。ただし、それはたんなる「無力」ではけっしてなく、むしろ現勢力化されているすべての「力」を政治的によせ、社会的によせ、思想的にせよをふたたびポテンシャルの位相へと引き込み、新たな主体性を想像・創造する可能性を提示するため「無力」にほかならないのである。「力」と「無力」という非対称関係を構築することで、われわれはようやく竹内の「終末観」について議論しはじめる段階になる。それに関連して、文学的無力がいかにして新たな主体性を想像するキッカケとなるのかという問題は、竹内の主な研究対象である魯迅においても見事にテーマとして書かれていると見做してもよい。ゆえに、同じ二〇二一年に『中国

社会と文化』に「エクリチュールと記憶の弁証法」という魯迅論を発表した。『呐喊・自序』のなかで、魯迅は自分がいかにして文学の営みに携わってくるようになったのかについて虚構とも非虚構ともいえない曖昧な物語を紡ぎながら、文学の現実に対する(非)力を示してみせるからである。

続いて学術誌 *Frontiers of Literary Studies in China* の第一五巻第一号のため、『特集 竹内好と日本の近代』の編集を担当した。竹内好と武田泰淳、丸山真男などの重要な日本知識人との関係について、計四本の論文を収録している。同誌に「On Takeuchi Yoshimi's Aesthetics of 'Eschatology」 という本研究においてもっとも重要な論文を寄稿した。繰り返していうが、竹内のいう「終末観」は基本的には宗教的な概念ではなく、革命のエネルギーを把握するための存在論的概念である。したがって、この論文は竹内の毛沢東論、とくにいわゆる「根拠地」に着目し、エネルギーの現勢力化と潜勢力化の絶え間ない運動を論じている。結局のところ、「終末」と呼ばれるものはただちに「終わり」を意味するのではなく、逆に消え去ったことから新たな主体性や新たな政治の痕跡をつねにすでにわれわれに提示してくれるといわねばならぬ。一方で、現勢力化したエネルギーがイデオロギーになり、ダイナミズムを失うことになることに気づき、不断の更新を引き起こすためにも、「終末観」というパースペクティブが不可欠である、という結論を論文のなかで下ろしているのである。また、この論文の中国語版は「主体、抵抗と革命的潜勢力」と改題され、二〇二二年『中国現代文学研究叢刊』(第六号)という中国国内で重要な学術誌に掲載された。竹内好のもっとも有名な研究者のひとりである孫歌に評価されている。

二〇二二年に出版された『私たちは世界の「悪」にどう立ち向かうか』(トランスビュー)という論文集には、「終末観」からみる竹内の憲法論についての論文「私たちの憲法“無感覚”

竹内好を手掛かりとして」が収録されている。それは竹内が一九五〇年代から一九六〇年代にかけて書いている一連の戦後憲法に関するエッセイを再読しながら、彼が憲法から見出した民衆のエネルギーの潜勢力を解明し、現在流行っている改憲論にそれを対峙させようとする作業である。たんに憲法の表現を文字通りに維持していこうとすれば、つねに改憲論者の「論理」に巻き込まれて一貫性が崩れる危険がある。しかし、竹内が強調したように、重要なのは憲法の表現を額面通りに受け取るのではなく、憲法に書いてある権利を実践することで戦後歴史の複雑な流れがもたらしてきた現実を刷新していくこと、すなわち憲法の未来を守ることである。それはまさに「終末観」からみる憲法の未来、そして日本社会や日本民衆の未来にほかならないと

思われる。

そして、竹内の「終末観」を研究するなかで、魯迅に対する新たな読み方をも手に入れたと感じ、魯迅に関して一冊の本を二〇二二年に出版した。それは『魯迅を読もう：〈他者〉を求めて』という軽いタイトルを持つ本である（春秋社）。そのなかで、魯迅の小説『故郷』を再読することで、竹内のいう「絶望」のもつ積極的な側面を克明に論じている。つまり、「終末観」のパースペクティブから見れば、魯迅における「希望」というものはあくまでも現在を生きる人々にとっての「希望」ではなく、むしろそれは計り知れない未来の世代にこそ任せるしかないもの、エネルギーがふたたびポテンシャルとして温存され、新たなかたちで生まれ変わるにまで「無力」としてしか存在しようがないものにほかならない。憲法を守ること、新たな政治を想像すること、そして近代におけるさまざまな革命や社会運動を振り返ること。それらの営みは、結局すべて「終末観」が提示してくれる視野のなかでもう一度考え直されなければならないかもしれない、というのは竹内を再読しながらつくづく実感していることである。

以上の成果をもって、本研究にいったん区切りをつけたいと思う。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Qin Wang	4. 巻 29(2)
2. 論文標題 Literature, Powerlessness, and Modernity: A Reading of Takeuchi Yoshimi 's 'What Is Modernity?'	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 positions: asia critique	6. 最初と最後の頁 50-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 王欽	4. 巻 2
2. 論文標題 希望的政治学	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 中国現代文学叢刊	6. 最初と最後の頁 86-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 王欽	4. 巻 6
2. 論文標題 主体、抵抗与革命的潜能	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中国現代文学叢刊	6. 最初と最後の頁 117-138
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 王欽	4. 発行年 2022年
2. 出版社 春秋社	5. 総ページ数 296
3. 書名 魯迅を読もう：〈他者〉を求めて	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------